

P2-070

幼児食の実態調査—過去の調査との比較—

岡 哉耶花¹、脇 真由美¹、緑 寿美子¹、
小泉 創¹、三浦 眞樹¹、太田 百合子²、山野 裕¹

¹アサヒグループ食品株式会社

²東洋大学ライフデザイン学部

【目的】

消化吸収が未熟な幼児期に、いつごろ何を食べさせて大人と同じ食事に近づけていくかは、保護者には重要なポイントとなる。現代の食生活の中でどのような料理を与えているか、過去の調査と比較してその変化を明らかにすることを目的とした。

【方法】

調査は、2016年10月に子育て中の女性（20～29歳）を対象として、インターネットによる直近1ヶ月の子どもの食に対する実態調査を行った。子どもは1歳（600名）、2歳（400名）、3歳（200名）の3区分とした。

過去の調査として「幼児食を中心とする実態（1997年国立総合児童センター・こどもの城、株式会社ベネッセコーポレーション・たまひよ研究所調べ）」を用いた。調査区分としては、1歳（495名）、2歳（603名）、3歳（390名）の3区分であり、年齢不明（55名）を含めると1,543名の郵送による調査結果となる。

それぞれの調査は、若干質問項目が異なるため、各食品に対し「あげていない」割合に着目し、18品目（牛乳、生卵、そば、落花生、いか、いくら、たこ、刺身、ローストビーフ、ミートボールあんかけ、細切り肉炒め、豚カツ、ウィンナー、茶わん蒸し、もち、酢の物、チョコレート、アイスキャンディー）について比較した。

【結果】

「牛乳」をあげていない割合は、1997年（1歳：3.5%、2歳1.0%、3歳：0.5%）、2016年（1歳：25.3%、2歳9.5%、3歳：7.0%）となり、2016年のほうが子どもにあげていなかった。同様の傾向は、「いか」、「たこ」、「ローストビーフ」の3品目以外の15品目（牛乳、生卵含む）でみられた。つまり、1997年に比べ2016年のほうが、あげる食品が減少していることがわかった。

【考察】

調査方法や回答者のリクルート方法に違いがあるため、同じような回答者を抽出できてはいないが、その点を踏まえても、2005年には「授乳・離乳の支援ガイド」が策定され、医療機関や管理栄養士・栄養士からの指導が普及したことで、母親のアレルギーや誤嚥に対する認識が変わり、2016年のほうがあげる食品が減った傾向になったと推測する。また、社会環境の変化として、1997年当時より共働き世帯も増え、母親の料理をする時間が減ったことで、子どもにあげられていない食品が出てきている可能性もある。

P2-071

学童の食生活習慣とその関連要因に関する疫学研究—保護者の喫食行動との関連—

佐藤 ゆき^{1,2}、鈴木 智恵子³、嶋原 美智子⁴

¹東北大学大学院医学系研究科

²東北メディカル・メガバンク機構

³佐賀大学医学部

⁴仙台市立七郷小学校

【背景】

学童期は心身の成長が著しく、生涯の健康の基盤となることから食生活習慣がもたらす影響は非常に大きいとされている。食生活習慣には家庭生活、取り巻く周辺環境、地域性、学校生活、その他潜在的な要因が複合的に関わる。本研究では近年の学童の食生活習慣の関連要因を明らかにするために関連予測要因を総合的に組み入れたパイロット調査を実施した。

【方法】

2015年11月から2016年3月に東北および九州の小学校計8校に在籍する1 - 6年生を対象に児の保護者に調査票の回答を依頼。調査票は無記名式とし、子どもの生活習慣、子どもの食事内容、保護者自身の食生活や健康意識に関する内容で構成した。

【結果】

対象児4,263名中3,327名の保護者から参加協力が得られた。自身が習慣的に食事を抜くことがあると回答した保護者は全体の23%、最も多い理由は仕事や忙しさ、次に食欲がない、ダイエット（体調管理）のためであった。保護者の食事喫食習慣別に子どもの喫食習慣をみたところ、食事を抜く習慣がある保護者の場合、学校のある日の子どもの朝食喫食は「食べない」1.3%、「週1 - 2回食べる」1.7%、「週3 - 4回食べる」2.8%、「週5 - 6回食べる」4.1%、「毎日」87.3%であり、食事を抜く習慣のない保護者では同順に0.3%、0.5%、1.7%、1.6%、94.2%であった。子どもの頃の食習慣や食の経験について子どもの頃に家族と一緒に食料品の買い物をした経験が「ほとんどない」あるいは「まったくなし」の割合（以下「経験がない」）が食事を抜く保護者では10.2%、食事を抜かない保護者では8.5%であった。同様に、食事を抜く保護者では家族の食事準備や後片付けを手伝った経験がない割合が14.2%、食事を抜かない保護者では10.2%であった。家族と一緒に料理をした経験がない割合は食事を抜く保護者では25.5%、食事を抜かない保護者では22.3%であった。

【考察】

保護者が自身の食事を抜く習慣がある場合、子どもが学校のある日に朝食を週1回以上食べない割合は9%、自身の食事を抜かない保護者の場合では4%であった。保護者の喫食習慣が子どもの食行動に大きく影響している可能性を示している。また保護者自身の子どもの頃の食経験が自身の現在の喫食行動を形成している一要因である可能性も示された。特に今回の調査結果では家族の食事準備や後片付けなど手伝いの経験の有無に差があり、食事に関する手伝いも家庭内での食育の基盤として重要であることが示唆された。